

2018年3月11日

聖書箇所：Ⅱテモテ2章1節～13節

## 「神のことばは、つながれてはいません」

本日のみことばをお読みします。聖書箇所は、テモテへの手紙第二2章1節から13節です。お読みします。

### 1. 伝道の働きにたずさわる

テモテへの手紙は、パウロからテモテ宛に書かれた励ましの手紙であります。パウロがこの手紙を書いた時には、獄中、すなわち牢屋にいました。それゆえ、テモテへの手紙は獄中書簡とも呼ばれています。まだ若かったテモテは、パウロの働きを担う（受け継ぐ）次世代のリーダーでありました。パウロはいつ処刑されるかもわからないような状況の中で、テモテに励ましの手紙を送ったのです。このことを思うと、パウロの本当に伝えたかったことが、この手紙には凝縮されているのではないかなと思うわけです。パウロは、テモテがキリスト者として生きていくために、どのような励ましの言葉を送ったのでしょうか。

2章1節。「そこで、わが子よ。キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい。」ここで重要な点は、「キリスト・イエスにある恵みによって」ということです。私たちは、自分の力で強くなることはできません。私たちも、これまでの人生の中で、そのように思わせられることもあったことだと思います。イエス様にある恵みによって強くされること。クリスチャンとして生きていく上で欠かすことのできないものです。

続く2節。「多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。」この思いがけない言葉に、読んでいる私たちは多少なりとも驚いてしまうのではないのでしょうか。というのも、1節では「キリスト・イエスにある恵みによって強くなりなさい」と言われているのだから、どうやったら強くされるのかが続けて書かれていると期待しているからです。しかし、どうでしょう。ここで言われていることは、「私から聞いたこと」、つまりパウロが伝えたみことば、つまり福音を他の人にゆだねなさい、ということ。一体どういうことでしょうか。

これはまさしく、パウロがテモテに対してしたことをするようにということです。つまり、福音を宣べ伝える働きにあなたも参加するように、みことばを宣べ伝えなさいということです。第1テモテ1章18節で、パウロは次のように言っています。「私の子テモテよ。以前あなたについてなされた預言に従って、私はあなたにこの命令をゆだねます。それは、あなたがあの預言によって、信仰と正しい良心を保ち、勇敢に戦い抜くためです。」つまり、福音を伝えるという働き、これは全てのキリスト者に与えられている使命であります。この働きに参加すること、実際に行うことで強くされるとパウロは言っているのです。誰かに伝道して、みことばをゆだねるようにということです。この宣教の働きに入ることで、キリストによって強められるのです。

福音を伝える、宣教することでどうしても避けては通ることができないものがあります。それは「苦しみ」です。3節。「キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをもとにしてください」。パウロは、伝道する者でありましたが、同時に苦しみをも受けていました。行く先々で迫害に遭い、そしてしまいには監獄に入れられてしまいました。だからこそパウロは、福音を宣べ伝える働きに参加することで強められるというのです。つまりそれは、そのような苦しみを受ける状況において、自分の弱さを知るときにこそ、キリスト・イエスにある恵みを体験するからです。パウロは、第2コリント12章10節でこのように言っています。「私が弱いときにこそ、私は強いからです」。伝道する中で、自分の弱さに向き合わされることもあるでしょう。ですが、そのようなときにこそ、キリスト・イエスにある恵みが豊かに現されるのです。

## 2. 苦しみが伴う働き

パウロは4節から6節で、3つの例えを使って、伝道の働きに対する心構え、または、あるべき姿を説明しています。つまり、王に仕える兵士、目標に向かって鍛錬する競技者、作物を育てる農夫の3つです。これら3つの共通点は何でしょうか。それは、1つのことに全力を注ぐということです。誠実に取り組むということです。兵士なら王のために命をかけて任務を全うし、競技者なら勝利を得るためにはどんな訓練をも厭いといません。農夫なら種を蒔くだけではなく、良い実がなるようにと雨の日も風の日も手入れを怠りません。しかし、それだけではありません。兵士も競技者も農夫にも、苦しみが伴うのです。パウロは、伝道する者もこのような心構えでいるようにと言っているのです。

それぞれについて、もう少し詳しく見ていきますと、4節。「兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。」ここでいう「日常生活に掛かり合っている」とは、言い換えれば、「日常生活のことに煩わされる」ということです。しばしば、日常生活と信仰生活を分離して考えるべきだと言われることがありますが、そのような二分した考え方がここで言われているわけではありません。信仰生活に悪影響を及ぼすような日常生活は改善されるべきだということです。私たちは、日曜日だけではなく、毎日「礼拝」する者であります。ある先生がこう言っていたことを今でも覚えています。「礼拝とは心の状態です」。つまり、礼拝というのは、日曜日のこの時間だけを意味するのではなく、全ての時間が礼拝であるということです。私たちが生かされている以上、この命を使ってすることは、神様を礼拝する生き方をすることです。日常での生き方に現される神様への礼拝が、日曜日に現れるような信仰生活を送りたいものです。

パウロがこの手紙を記した時には、監獄の中に閉じ込められていたということは、先ほど申し上げましたが、当然、そこには兵士がいました。兵士たちは、囚人たちが逃げ出さないようにと、しっかりと目を覚まして見張っていたことでしょう。パウロはその姿を毎日見ていたわけですが、パウロは捕まっている身でありながら、毎日兵士たちの振る舞いを見ているうちに、感動すら覚えたかも知れません。兵士たちは自分に与えられた役割を、日常生活に煩わされることなく行っている。皇帝に対して完全な忠誠を尽くし、仕えている。

ですが、クリスチャンはただの兵士ではありません。「キリスト・イエスの立派な兵士」です。つまり、日常生活に煩わされることなく、私たちの主であり王であるキリスト・イエスに完全な

忠誠を尽くす者なのです。兵士たちは、徴募した者を喜ばせるために、その兵役に励んでいました。ですが、クリスチャンは召しを与えてくださった方、つまり神様を喜ばせるために、与えられた役割に励むべきです。パウロはエパフロデトやアルキポを「戦友」と呼んでいました。このことから、キリスト・イエスの兵士である者同士、苦しみをともにすることも覚悟しなければならないでしょう。

競技者については5節。「また、競技をするときも、規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることはできません」。競技には、規定つまりルールがつきものです。ルールがない競技は、何でもありのただの遊びになってしまいます。ルールがあるからこそ達成したときの喜びがあるのです。では、クリスチャンが競技者であるなら、クリスチャンにとってのルールとはなんでしょう？それは、「何事も神の栄光が現されるためにする」ということだと言えるでしょう。例えば、参加する競技が「人生」であるならば、クリスチャンは「全ては神様のためになさなければいけない」というルールがあると言えます。第二テモテ4章7節と8節で、パウロはこう言います。「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです」。私たちクリスチャンは、競技者として、ある意味スポーツマンシップにのっとり、競技に向き合う必要があるのです。

農夫については6節。「労苦した農夫こそ、まず第一に収穫の分け前にあずかるべきです」。種を蒔くだけでは、食物は育ちません。水をやって、肥料を与えて、雑草を抜いてやると実がなるのです。365日、片時も目を離さずにいる忍耐が必要だと言えるでしょう。その点において、クリスチャンとして生きることは決して楽なものではないと、パウロは言っているのです。ですが、ここで言われているように、労苦した農夫には収穫が待っています。クリスチャンもまた、キリストによる救いの希望があり、キリストの再臨を待ち望んでいるのです。

これらのことから、福音の働きとは、兵士のようにであり、競技者のようにであり、農夫のようであるとパウロは語っています。では、この3つの生き方を実践した人は誰でしょうか。それは、イエス・キリストです。イエス様は、兵士のように父なる神様の命令に、最後まで従い尽くしました。たとえ、それが十字架の道であったとしても。イエス様は競技者のように、神様が与えられたルールを守り抜きました。サタンの誘惑にも負けずに、罪を一度も犯されませんでした。イエス様は、農夫のように福音の種を蒔きました。蒔くだけでなく、実がなるように、諦めずに何度か何度か福音を語り続け、愛を注ぎ続けました。ペテロが3度イエス様を否定しても、最後まで見捨てることはありませんでした。

私たちは、このイエス・キリストに倣って生きることが期待されているのです。8節。「私の福音に言うとおりに、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい」。「イエス・キリストを、いつも思っていなさい」。この言葉は、とても大切に、奥深いものです。私たちは、イエス様についてどのようなイメージを持っているのでしょうか？確かに私たちは「ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえったイエス・キリスト」を信じています。ですが、そのイメージは完全なものではないのです。私たちが思うイエス様は、実際のイエス様よりも過小に見ていると言ってもいいと思います。だからこそ、もっともっとイエス様を知りたいと思うのです。このイエス・キリストこそが、福音を伝える者として、苦しみを受けら

れたのです。イエス様の生き方こそ、パウロが伝えようとしているキリスト者としての生き方なのです。

とはいえ、イエス様の生き方を知れば知るほど、イエス様が受けた苦しみも知ることになります。福音を伝える者には苦しみがつきものなのです。それは、イエス様の生涯を振り返るときに明らかでしょう。このような苦しみを考えた時、また実際に直面した時に、私たちは恐れを抱いてしまうでしょう。その恐れを乗り越えられるか不安でいっぱいになります。ですが、本日の聖書箇所において、この苦しみに対する希望も語られているのです。

### 3. 神のことばはつながれていません

9節「私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばは、つながれてはいません」。パウロは、福音を伝える者でありましたが、この手紙を書いた時に、まさしく苦しみを受けていました。犯罪者のように牢屋の中に閉じ込められていたからです。それなのになぜ、パウロはテモテを励ます手紙を書くことができたのでしょうか。本当はパウロ自身がどれほど励まされたいと思ったことでしょうか。それでもパウロが希望を持ち続けることができたのは、「神のことばはつながれていない」ということを、パウロは知っていたからです。パウロは繋がれていましたが、神のことばは伝え続けられました。福音を宣べ伝える者にとっての喜びは、神のことばが自由に大胆に語り続けられることです。

その先にあることは何でしょうか。12節。「ですから、私は選ばれた人たちのために、すべてのことを耐え忍びます。それは、彼らもまたキリスト・イエスにある救いと、それとともに、とこしえの栄光を受けるようになるためです」。パウロは共に救いと栄光を受けることを待ち望んでいるのです。福音を宣べ伝えるのは、全ての人々が救われるために他なりません。ヨハネの福音書3章16節。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」。それゆえに、パウロは「すべてのことを耐え忍ぶ」のです。パウロは自分さえ救われれば良いと思っているわけではありません。共に救いと栄光を受けることを願っているからこそ耐え忍んでいるのです。

11節から13節のことばは、そのような生き方を目指す私たちにとって、励ましと慰めに満ちたものと言えるでしょう。11節から13節。「次のことばは信頼すべきことばです。『もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである』」。私たちがこの世界に生きて以上、完成へと向かう途上にあります。その中では、当然、自分自身の弱さにも向き合うこととなります。私たち自身が真実ではないという事実にもぶつかることもあるでしょう。ですが、「私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである」と言われている通りです。これはどういうことでしょうか。これは、私たちの不真実ゆえに、神様ご自身が苦しまれたということです。私たちは不真実であるけれども、同時に神様は一人一人を愛して下さっています。つまり、キリストはご自身を否むことができない、それゆえに、ご自身が十字架によって苦しまれたのです。

#### 4. さいごに

私たちの中で、自分の弱さに失望し、嫌気がさし、自己嫌悪に陥っている人はいるでしょうか。日々の困難や苦しみの中に絶望している人はいるでしょうか。この世界に生かされている以上は、苦しみがつきものです。ですが、見方を変えてみましょう。苦しみの中でこそ、イエス・キリストの恵みが豊かに現されるのです。私たちの中で、成功している人はいるでしょうか。そのような時は、真実な神様に感謝しましょう。私たちは不真実なものであり、真実なお方はキリストです。

今朝は、第二テモテ2章から、クリスチャンが福音を伝える者として生きていく中で受ける苦しみとそこにある希望について見てきました。福音を伝えるという宣教の働きを日々の生活の中で実践しましょう。それは、兵士のようにであり、競技者のようにであり、農夫のようなものです。それらは、ある目標に向かって、全力を注ぐような生き方です。だからこそ、イエス・キリストをいつも思っています。イエス様こそ、全てを完全に達成されたお方です。そのような生き方には苦しみも伴います。ですが、苦しみの中でこそ強められ、そこに希望があるのです。それは、「神のことばはつながっていない」とパウロが述べている通りです。私たちに与えられているこのみことばは、はるか昔から今日に到るまで、誰にも阻まれることなく伝えられてきたものです。みことばは私たちに励ましと慰めを与えます。苦しみに直面した時に、乗り越える力を与えてくれます。私たちは、キリストと共に生き、キリストと共に治める日々を待ち望んでいます。なぜなら、みことばがそのように教えているからです。

「もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである」